平成２９年度教育研究活動促進事業費補助金（北海道教育委員会）
研究紀要（１年次報告）NO.９２

学習指導に関する調査・研究委員会

授業力の向上と校内研究の活性化に関わる支援の在り方

～対話的な学びのある授業づくりの促進を通して～

平成３０年３月

後志教育研修センター

発刊に当たって

平昌(ピョンチャン)五輪では、多くの感動を享受して閉幕した。日本人選手の活躍ぶりが著しかったのも記憶に新しい。勝利をつかみ取ったその陰には、人並み外れた努力や精神力は想像を絶するものがあったことだろう。とりわけ、団体競技における道産子選手のコミュニケーション力とチームワーク力が際立っていたことも印象深い。大舞台においては、個の能力の高さは勿論のこと、チームとしての能力をいかに最大限発揮するかが問われてくる。

学校現場においては、個人で行う仕事領域と組織で取り組む仕事領域がある。研究に携わってきた当研修センター所員は、今年度より新たな研究主題に基づいて、組織的な実践として、「対話的な学び」に焦点を当てた授業デザインを探ってきた。今年度は、三校(倶知安小学校、蘭越中学校、黒川小学校)で検証授業を行うことができた。こうした取組は、個々の教師の授業をより質の高いものに変えていく結果となっている。また、校内研究の活性化にも大いに貢献してきたと考えている。

改めて、教師の役割は何かを考えてみたい。それは、「つなぐ」ことにあるのではないだろうか。教師と子供、子供同士、教師同士、学校と保護者、学校と地域、学校間、学校と社会等…。これからの社会においては、一人一人の子供たちが、自力でつながる力を身に付けていくことが求められる。教師は、その手助けをすることになる。教師集団としてつながり、一丸となって教育に臨むことで、子供たちに安心して学ぶ環境が整えられることになる。

社会の加速度的な変化に対応する上で、学校教育に期待される役割も過度になってきている。教育は、学校だけで行うものではなく、保護者や地域社会、他校種等との連携を生かすことでより豊かになる。その際に、一部の教師が外部の人とつながるのではなく、学校全体として協働体制が確立されていることが何よりも重要である。私共研修センター所員は、後志全体へその大きな架け橋を築いていくことに共に知恵を絞り、汗をかき、尽力してまいりたい。人と人とのつながりなくしては、人はけっして育たないことを肝に銘じて…。

ロシアの心理学者ヴィゴツキーは、「学びは人と人との間で起こる」と表現した。だから、勉強して解りたいと思うようになる周囲の環境、すなわち他者との関係づくりが重要になると言っている。人と人とのつながりが大事にされ、温かな人間関係のネットワークが構築されている環境では、子供たちが大切に育てられ、さまざまな力を伸ばすことができる。

シュライヒャー氏(ＯＥＣＤ教育・スキル局長)は、「学校では従来、問題を小さな要素に分解して、子供たちに解決法を教えていた。これから求められるのは、さまざまな要素を統合して新たな価値を作り上げ、それを説明できる能力になる」と語っている。他者と協働しながら「正解のない問題」に対応する力や生涯にわたって学び続ける力等、高度で汎用的な知的、社会的能力が必要とされる所以である。したがって、できた、解けたという「わかる」レベルの思考から、「使える」レベルの思考へ子供たちを導いていくことが一層肝要となる。

今後も当センターと後志教育局をはじめ各種研究団体とも連携を図りつつ、管内全ての小中学校で質の高い授業が実施される仕組みを構築してまいりたい。

結びに、本研究の推進に当たり、利他の心を発揮して取り組んだ有能な所員と全面的にバックアップしてくれた研究協力員に深くお礼申し上げる。併せて、ご支援・ご協力賜った後志教育局、検証授業校、教育関係機関に厚く感謝申し上げる次第である。

後志教育研修センター　所長　平　野　雄　二

目　　次

◇発刊に当たって　　後志教育研修センター　所長　　平　野　　雄　二

学習指導に関する調査・研究委員会

【第１章】　研究の概要
１　研究主題および副主題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学1―　1
２　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学1―　1
３　研究仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学1―　2
４　研究の視点　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学1－　2
５　研究計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学1―　3
６　研究構造図　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学1―　5

【第２章】　研究の内容
Ⅰ　視点１　「実践的指導力の向上を図るための教職員研修の工夫・改善」
１　メンターチームを活用した授業づくり　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学2―　1
２　授業研究を核とした校内研修の在り方　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学2―　3
３　マネジメントサイクルを機能させた校内研修体制の確立　・・・・・・・・・・　学2―　8
４　ワークショップ型討議の実際について　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学2―11

Ⅱ　視点２　「確かな学力を育成するための授業改善」
１　授業の基盤となる学習訓練の在り方について　・・・・・・・・・・・・・・・　学2―20
資料①指導計画作成例　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学2－30
資料②研修講座「学習指導（授業づくり）」学習指導案　・・・・・・・・・・・・　学2―32
資料③研修講座「学習指導（授業改善）」学習指導案　・・・・・・・・・・・・・　学2―36
２　各教科・領域の授業モデル案　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　学2―43

【第３章】　検証授業
１　倶知安町立倶知安小学校の実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　検　1～　4
２　蘭越町立蘭越中学校の実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　検　5～11
３　黒川町立黒川小学校の実践　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　検12～15

【第４章】　研究の成果と課題

◇あとがき

＜第１章＞研究の概要

１．研究主題および副主題

授業力の向上と校内研究の活性化に関わる支援の在り方
～対話的な学びのある授業づくりの促進を通して～

２．主題設定の理由

現代社会は，少子高齢化に加え，知識基盤社会の到来やグローバル化の進展など，急速に変化を遂げている。特に，人工知能（ＡＩ）が飛躍的に進化し，「人工知能がさらに進化して，人間が活躍できる職業が無くなるのではないか」「今学校で学んでいることは，時代が変化したら通用しなくなるのではないか」と懸念されている。今を生きる子どもたちが確実に未来の創り手となれるよう，必要な知識や力を確実に備えられる学校教育の実現が急務となっている。

新たな主題設定に関わる社会的背景

「今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」
（マイケル・A・オズボーン氏（オックスフォード大学准教授））

「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろう」
（キャシー・デビッドソン氏（ニューヨーク市立大学教授））

こうした中，新学習指導要領について，中央教育審議会より改定内容が答申された。平成 32 年度（2020 年度）には小学校，平成 33 年度（2021 年度）には中学校で全面実施される。そこでは，新しい時代に必要な資質・能力として「何を知っているか，何ができるか」「知っていること・できることをどう使うか」「どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか」の３点が取り上げられ，これらの能力を育成するため「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。

【主体的な学び】‥学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら見通しをもって粘り強く取り組み，自己の学習活動を振り返って次につなげる。

【対話的な学び】‥子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手がかりに考えること等を通じ，自己の考え方を広げ深める。

【深い学び】‥‥‥各教科等で習得した概念や考え方を活用したり，「見方・考え方」をはたらかせ問いを見出したり解決したり，自己の考えを形成し表したり，思いを基に構想・創造したりする。

今後，児童生徒が社会を力強く生き抜いていくためには，他と関わり合い学び合う中で，新たな価値の創造に挑み，未来を切り開いていく力が必要とされる。これらを踏まえ本研修センターでは，「授業力の向上と校内研究の活性化に関わる支援の在り方」という研究主題のもと，３ヶ年計画で研究推進に取り組んでいくこととした。対話的な学びを生み出す単元・課題設定の在り方や，効果的な対話法について研究・推進を行うとともに，後志管内各校に組織的・計画的な校内研修の進め方の指針を提案していく。

３．研究仮説

《仮説１》組織的な校内研究体制の確立とワークショップ型研修を推進することで，協働性と個々の資質・能力の向上を図ることができる。

《仮説２》児童生徒が主体的に対話できるような授業づくりの指針を示すことで，後志管内各校の校内研究推進のニーズに応えることができる。

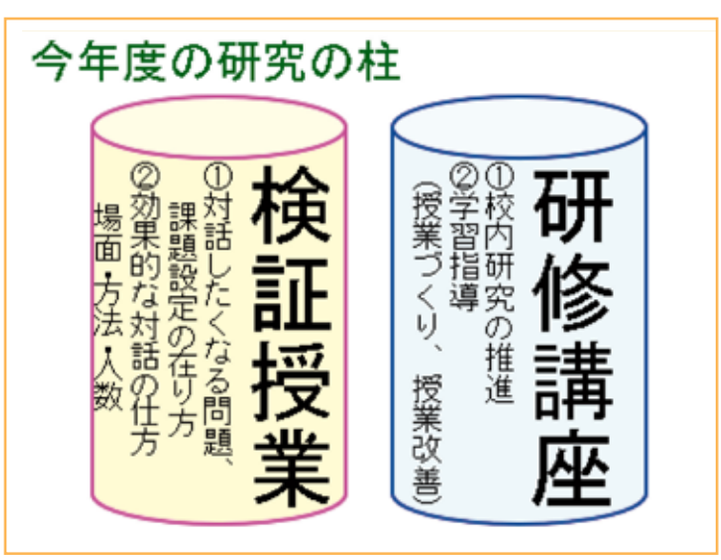
４．研究の視点

《視点１》実践的指導力の向上を図るための教職員研修の工夫・改善

- ●センター所員の所属校での検証授業の実施
- ●組織的な校内研究体制の確立と，ワークショップ型研修の推進
- ●メンターチームによる授業研究

《視点２》確かな学力を育成するための授業改善

- ●主体的・対話的で深い学びを目指した授業
- ●若手教員のための，１時間の授業づくり
- ●問題解決学習を基盤とした各教科における授業モデルの提案



上記の視点の具現化のために，本研究委員会では，左記の２本の柱を立てて，研究を推進していくこととした。いずれも後志管内各校に，本研究の情報発信が可能な方策であると考えたためである。「検証授業」については，センター所員が所属する学校で３本の授業を行った。「研修講座」については，センター所員が講師となり，本研究の内容を基盤とした３つの講座を開講することとした。

５．研究計画

（１）年次計画

【第１年次】平成２９年度（２０１７年度）「理論研究と実践」
○「研究主題」「主題設定の理由」「研究仮説」「研究の視点」の確立
○理論研修と資料収集により，具現化した授業構築
○検証授業
○研修講座「学習指導（授業づくり・授業改善）」「校内研究」の開催，運営
○中間報告書の作成，報告会に向けた準備，発表，研究紀要Ｎｏ．９２の作成

①検証授業の実践

８月２５日（金）	倶知安町立倶知安小学校３年「算数」の授業実践 単元名「１００００より大きい数」　（授業者：佐藤絢香　教諭）
１０月２５日（水）	蘭越町立蘭越中学校１年「保健体育」の授業実践 単元名「柔道」　（授業者：齋藤一真　教諭）
１１月　９日（木）	余市町立黒川小学校４年「国語」の授業実践 単元名「アップとルーズで伝える」　（授業者：中越大資　教諭）

②部員による研修講座の実施

６月１４日（水）	研修講座「校内研修」　対象：分掌チーフ･ミドルリーダー層（５年程度～），研修担当者 研究主題の設定法や手順等，組織的・計画的な校内研修の在り方について
６月２６日（月）	研修講座「学習指導（授業づくり）」対象：初任段階層（１～５年程度の経験年数） 授業づくりの基礎基本や，すぐ使いたくなる授業のワザ
８月３０日（水）	研修講座「学習指導（授業改善）」　対象：分掌チーフ･ミドルリーダー層（５年程度～） 児童生徒の主体性や対話力を育てる指導の工夫改善について

（２）今年度の年間計画

	月　日	曜	主　な　活　動　内　容
①	５月１６日	火	第１回研究委員会 ・委員長，副委員長選出 ・年間計画の作成 ・研修講座講師決定 （検証授業校，授業者の決定）
②	６月　６日	火	第２回研究委員会 ・研修講座「校内研修」及び「学習指導（授業づくり）」講座内容の確認，検討 指導案検討含む
③	６月１４日	水	第３回研究委員会 ・研修講座「校内研修」運営，参加
④	６月２６日	月	第４回研究委員会 ・研修講座「学習指導（授業づくり）」運営，参加
⑤	８月　３日	木	第５回研究委員会 ・研修講座「学習指導（授業改善）」講座内容の確認，検討，指導案検討含む ・後志教育講演会　運営，参加
⑥	８月２５日	金	第６回研究委員会 ・検証授業①（倶知安町立倶知安小学校）
⑦	８月３０日	水	第７回研究委員会 ・研修講座「学習指導」講座運営，参加
⑧	１０月２５日	水	第８回研究委員会 ・検証授業②（蘭越町立蘭越中学校）
⑨	１１月　９日	木	第９回研究委員会 ・検証授業③（余市町立黒川小学校）
⑩	１２月１２日	火	第１０回研究委員会 ・報告会に向けた内容検討
⑪	１月　９日	火	第１１回研究委員会 ・研究紀要内容検討 ・報告会運営，参加，研究の報告
⑫	１月３０日	火	第１２回研究委員会 ・研究紀要原稿持ち寄り，検討
⑬	２月１３日	火	第１３回研究委員会 ・研究紀要原稿，最終チェック

研究の方向性

実践を通した研究の検証

研究の総括

６．研究構造図

今日的な教育課題や社会的要請

・グローバル化の進展や人工知能（ＡＩ）の飛躍的な進化など，社会の加速度的な変化
・学習指導要領の改訂
・組織的な校内研究に取り組む風土や学校文化の創造

学校現場のニーズ

研修センターに期待される役割

授業力の向上と校内研究の活性化に関わる支援の在り方

～対話的な学びのある授業づくりの促進を通して～

目指す校内研究組織

・全教職員で取り組む協働体制
・悩みの共有化
・共感的な高め合い
・メンターチームによる教材研究

目指す教師像

・力を高め合いながら，協力して課題解決に向かう教師

研究体制・方法

・検証授業　・理論研究　・研修講座「学習指導」「校内研修」

《視点１》
実践的指導力の向上を図るための教職員研修の工夫・改善

●センター所員の所属校での検証授業の実施
●組織的な校内研究体制の確立とワークショップ型研修の推進
●メンターチームによる授業研究

《視点２》
確かな学力を育成するための授業改善

●主体的・対話的で深い学びを目指した授業
●若手教員のための，１時間の授業づくり
●問題解決学習を基盤とした各教科における授業モデルの提案

《仮説１》

組織的な校内研究体制の確立とワークショップ型研修を推進することで，協働性と個々の資質能力向上を図ることができる。

《仮説２》

児童生徒が主体的に対話できるような授業づくりの指針を示すことで，後志管内各校の校内研究推進のニーズに応えることができる。